F 22

広島県の郷土食に関する実態 ― 日本型食生活の見直しをめざして ―

広島文教女大短大　長石浩子

目的　日本型食生活の見直しをめざして、広島県の郷土食に関する実態を把握するために、次の事項を調査した。①既食の有無、②摂取回数、③入手方法、④嗜好の度合。また、②と④から摂取回数と嗜好の相関々係を、全体及び家族形態別にみた。

方法　広島県下6地域の小学校5・6年生，中学校2年生，高等学校2年生の男女1928名を対象に、1989年7月～9月にかけてアンケート調査を行った。その内容は、調査地域の代表的な郷土食30品目と、地域、年代、集団の特性、調査方法などが異っても、殆んど同じ結果であるといわれている現代の子どもたちの好きな料理30品目について、自記方式、選択肢法とし、質問紙の配布、回収は調査校の先生に依頼した。

結果　現代食については全国とほぼ変わらない食生活を営んでいる小・中・高校生に、郷土食では地域差がみられた。①その地域の郷土食がおおむねたべられている。②学年進行につれて、その地域の郷土食を好むようになる傾向がみられる。③地域によって郷土食の摂取回数と嗜好の相関々係に差がみられ、山間部よりも広島湾沿岸の方が相関が高い傾向にある。すなわち、好きなものを回数多く食べていると言える。④三世代家族と核家族では、三世代家族の方が郷土食をよく食べている。⑤或る地域だけに食べられている郷土食がいくつかみられ、代表的なものは備北山地のわにのつくりと、瀬戸内沿岸・島しょのいぎす豆腐である。⑤すでにわに料理で郷土食の現代的食べ方の開発が試みられているように、郷土食の料理法の研究、摂取方法の研究―幼少の頃から食べ慣れさせる、教材化の必要などが見られ、カリキュラムへの展開を計画している。